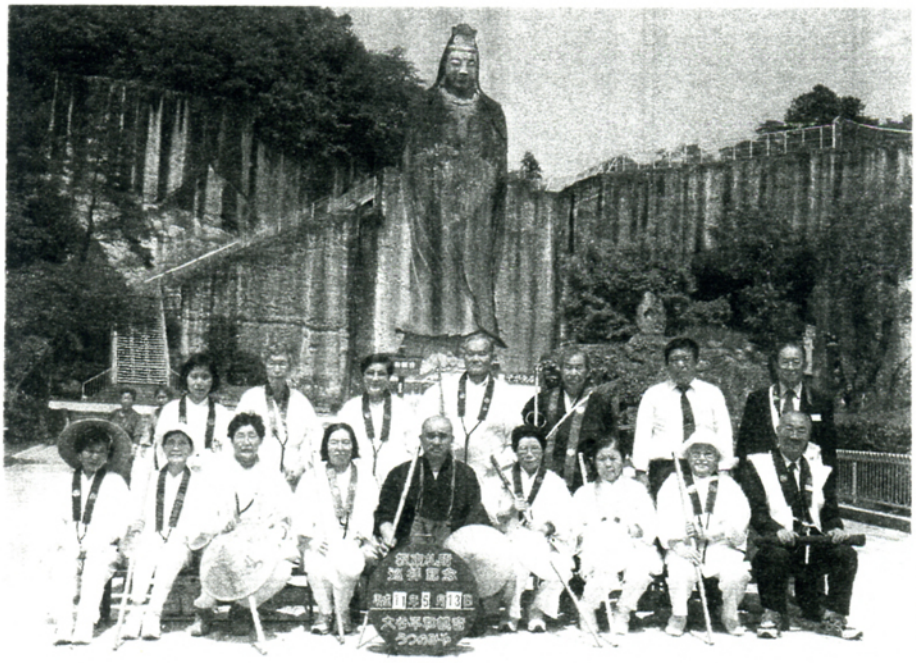

平成11年8月
第 31 号

発集発行
広島県安芸郡府中町
茂陰２丁目2－8－4
真言宗　正観寺
小 出 真 行

悪いことをしなければ苦しむこと無く
善いことをすれば楽を得るのである
（秘蔵宝鑰）

霊場巡り

五月十日夕刻に広島を発ちました。前期「坂東観音霊場巡り」は、無事大過なく巡礼を終えました。

道中、たくさんの観音さまにお会いすることができ満足しています。特に印象的だった第十九番の大谷寺（おおや）では写真でご覧いただけるような高さ約二十七mの平和観音像が私達を出迎えました。この平和観音像は、第二次世界大戦に亡くなられた数百万という戦没者の霊をなぐさめ、世界平和を願うために、昭和三十一年五月四日に大谷観音の前立（まえたち）として開眼されたそうです。

大谷石の洞穴に建てられた観音堂

仁王門をくぐると大谷石(以前は建築等に使用されていた)の岩壁に埋もれるように観音堂が建ち、その奇観に圧倒されました。本尊は弘法大師が一夜で彫ったと伝えられています。「細身で七頭身の流麗な千手観音」(標高約三、八九m)の磨崖仏は、石心塑像(せきしんそぞう)という手法で、ほの暗いなかで浮かび上がる淡い緑色をした滑らかな姿は、生命感すら感じさせるじつに神秘的なものでした。ほかに釈迦三尊像、小さめの薬師三尊像、阿弥陀三尊像は、それぞれ格式も雰囲気も異なりましたが、見事な磨崖仏でした。

なお、車中で時間を過ごすなかで、上の句、中の句、下の句と別々の語句を並べた俳句も、不思議とマッチしていましたので、少し紹介してみましょう。

うとうとと　楽しく過ごす　ありがたや
お参りも　いろは坂越え　初夏の花
遠く来て　曙の富士　高らかに
はしゃいで　お姿近く　今ここに
大谷石　観音さまと　御開帳
みなといく　中禅寺湖より　目にあおば
大洗　話はずむか　海の色

いかがですか、ばらばらの句でしたが、見事に巡礼されました人の思いを刻んでいますね。

心の彼岸へ

般若心経は、たった十四行、僅か二百七十余字一枚の紙に書き足らんほど短いお経ではありますが、簡にして要、約にして深く、現代人の悪夢を目覚めさす上には、最上の薬なのです。その心経の終わりの言葉に、

「羯諦、羯諦、波羅羯諦、波羅僧羯諦、
　菩提婆婆詞」

とありますが、お大師様はこの呪文を「秘蔵真言分」と申して、最も大切なところだと教えておられます。「羯諦」とは「行きましょう」という意味で、呪文の全体では「行きましょう。もっと行きましょう。どこまでも行きましょう。そしてみ仏の彼岸にわたりましょう」という仏教徒の誓いのことばなのです。

おもえば、私達人間は、来開の頃から目ざましく知識は発達し、ややもすればその発明の原水爆で、全人類が自滅しかねないのです。そんなことでは全人類は理想の彼岸にわたらず地獄におちてしまいます。どんなに文明の利器が発達しても、その人の心か動物では平和な心の彼岸にわたることができません。

現代人の悩みは、科学知識の方が進みすぎて、人間の心の発達がおくれてしまったところにあるようです。心の発達、それは自分の欲よりも人のためになりたいという仏心、すなわち「菩提心」が発達することです。

私たちがどんなに世界の平和を望んでも、その世界をつくっている私たちの心を、美しい心にしなければ、真の世界平和をつくることはできないでしょう。原水爆反対、軍備全廃が叫ばれている今、み仏の教えの船に乗って美しい心の彼岸を志さねばなりません。

行きましょう。美しい心の彼岸へ。
どこまでも進んで平和な世界を実現しましょう。

あの世・この世

人は死んだらどうなるでしょうか？　古今を問わずきわめて重要な問題です。

誰でも家族と死別したときほど戸惑うことはありません。実際に悲しさ、寂しさを通り越してしまいます。いつまでもそばにいる安心感、いつまでもそばにいてほしいという希望が死別によって根こそぎにされ、ぽっかりとあいた心の空洞はなかなか埋めきれるものではありません。でも、戸惑う中にも故人の行き先がわかれば一安心し、また別の世界で次の生命を得てほしいと願い、再び会えるなら、会うための努力を惜しむ人はいないでしょう。ですから、死んだ先のことも問題となるのです。

釈尊は修行の末に悟りを開き、誰もが感じている死の恐れや不安また人間関係から生じます葛藤の要因を突き止め、それを煩悩として退けたのです。それは、家族、親族、友人などに対する情愛を煩悩だとして、その思いを離れる筋道を明らかにしたのです。出家修行者たちは「悟りに導く智恵」を目指し修行に励み、大乗の菩薩は「悟りから生じる慈悲」をよりどころとして衆生救済を誓願し、この世の苦悩を除き、死後の不安をもった人には極楽世界に導くことを約束したのです。

救いを求める人々に要求されることは、信じること「信」、きちんと考えること「智恵」、あきらめないで励むこと「努力」です。いいかえれば、死後の世界がどうなっているかわかっていないことを空想して迷い悩むより、今の自分の生き方を死後に継続させていけ！　という現実的な考え方なのです。苦難を離れ安穏に生きていく筋道を示すことを現世利益といいますが、真言宗も現世を重視した考え方のうえに成り立っています。

ですから、死んだらどうなるかというより、今をどう生きるかに置き換えられる問題なのです。

葬儀は告別式ともいわれるように故人との別離の意味も含んでいますが、先立った人の立場では死後、すなわち新しい世界の門出の儀式ですから、葬儀は故人が本当の世界に生まれかわる儀式とも考えることができます。真言宗では、本尊大日如来の世界へ入り、本尊の世界に生まれかわることが主眼であり、願われていますから厳粛な中にも少し華やかな儀式となっているのです。また死者に対する供養は経典読誦の霊力で払われ、人がこの世に生まれ去って行くありさまは、古今より次のようにうたわれています。

「阿字の子が　阿字の故郷立ちいでて　また立ち帰る　阿字の故郷」

阿(ア)はアイウエオのアと考えて下さい。アが五十音の最初であるように大日如来は万物の源であり母にあたります。ですから大日如来とア字と表し、衆生を阿字の子といいます。阿字の故郷とは大日如来の世界、すなわち生き死にを含み越えた境地です。つまり、私たち大日如来の子は、母である大日如来の故郷から、この世に生まれ、この世の寿命が尽きると再び生まれ故郷へ帰っていくという意味です。

これが私たちの命の土俵と維持です。一心に祈り意識を高めれば、生きている人も、去って行く人も分け隔てはないのです。死んだらどうなるかと考えることも大切ですが、お互いを大日如来の子として尊敬し、力になり、支えあって行く、現時点の生活姿勢が大切なのでしょう。

「信心の第一歩」

真言宗のお仏壇には、本尊として中央に大日如来、左に不動明王、右に弘法大師の像がお軸をまつるのが一般ですが、弘法大師のみ、また大日如来、阿弥陀如来、観世音菩薩や、有縁の

菩薩像をおまつりされる方もありますが、真言宗のたてまえから申しますと一切の仏菩薩は、みな大日如来の徳をもっておられるほとけさまですから、どの仏さまを拝んでも、大日如来に帰入するのです。また、生身の大日如来として、弘法大師と御本尊とすることもありがたいのです。

何れにしても、香花灯明を供え、御飯やお茶湯を供え心つくしの誠をささげて礼拝を欠かさないように、一つには精神供養のために、二つには一家の繁栄と無病息災を祈念するために、三つには祖先の回向供養のために、数珠を手にかけ掌を合して心静かにご宝号を唱えます。

「朝に礼拝、夕に感謝」という聖句がありますが、全く、朝夕鐘の音が響き、お経の声がもれてくる家は、本当に尊いお家なのです。ですから、信心の第一歩はまず仏壇の供養を大切にするというところから出発しなければなりません。

さて、新たに仏壇を設置する場合、よく向き方を詮索される方がありますが、

迷故三界城　迷うが故に三界は城となる
悟故十方空　悟るが故に十方は空なり
本来無東西　本来東西無し
何処有南北　何れの処にか南北あらん

といってあります通り、方向は人間が定めたものですから、さほど気にすることはありません。要は家の内で一番上位で清浄な部屋を選ぶのが本当ですが、そのことでかえって家中のものが礼拝し難い場になっては「仏、ほっとけ」となりかねません。あまり軽視にならぬ程度で家中の者が、すぐ礼拝しやすい部屋に安置することが大切のように思われます。

仏をおまつりするには、必ずお供物をしますが、このお供物もいろいろありまして、代表的なものに六つあります。それは、水・塗香・花・線香・ご飯・灯明です。この六つは仏さまの六つの徳を表したもので、六つの智徳を修行することによって仏の心に通じ、仏の心と一つにとけ合ってしまうのです。

六つの智徳を六波羅蜜と申しまして

ほどこし　（布施）
たしなみ深くくらすこと　（持戒）
苦難を耐え忍ぶ　（忍耐）
こころより勤め働く　（精進）
落ちつきある生活をする　（禅定）
正しくものを識る　（智慧）

の六つです。この六つのうちの、どの一つかでも成就すると、ほかはおのずから成就するようになるのです。布施と持戒は貧りの心をなくし、忍耐と精進は瞋恚の心をなくし、禅定と智慧は愚痴や邪見のすがたをなくします。そして、貧・瞋・痴の三つの毒気がなくなると仏さまの心に通じるのです。

墓地有

一㎡　八十万円より

※他宗派の方も可